平成２８年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

伊吹島−出部屋−より未来へ発信
～ハートの島より愛を込めて～

代表者　　山　尾　菜　摘　（医学部看護学科４年）

１．目的と概要

このプロジェクト事業は、出部屋で産後を過ごした人たちも高齢となり、今後歴史的な価値ある文化の継承が困難となる可能性があるため、その人々の語りにより当時の様子や思いを伝え多くの人に知ってもらうこと、出部屋の歴史や文化に触れることで、「いのち」が生まれることについて若い世代の人々が自己の考えを見つめる機会を提供することを目的とする。

２．実施期間（実施日）

平成２８年５月１３日から　平成２８年１２月１４日まで

＜主な活動＞

環境整備：平成２８年９月２９日・３０日

瀬戸内国際芸術祭２０１６：平成２８年１０月１５日・２２日

３．成果の内容及びその分析・評価等

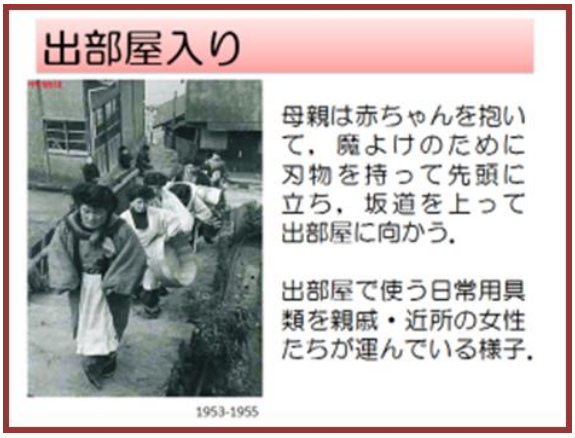
活動に先立ち、まず伊吹島歴史研究会代表世話人の三好兼光さんに協力をお願いし、具体的な活動計画について話し合った。出部屋に実際に行き、出部屋跡地の状態や昨年度のプロジェクトで設置した出部屋までの道案内板の箇所・個数、それらの状態を確認した。後日、２日間かけて出部屋跡地の環境整備を行った。環境整備では、雑草抜きやハーブの植え替えなどを行った。

また、私たち自身の出部屋に対する理解を深めるために、当時の生活や思いについて、実母が出部屋を利用した女性１０名にインタビューを行った。文献や資料などでは十分に把握できなかった出部屋での生活の様子を聞くことができた。

瀬戸内国際芸術祭２０１６では、昨年度作製したパンフレットを船着き場で配布した。また、＜出部屋入り＞や＜出部屋での生活の様子＞など、出部屋に関するパネルを作製し、それらを用いて出部屋跡地で説明を行った。２日間で約３００人が出部屋跡地を訪れ、そのうち約１００人に感想等のアンケートに協力していただいた。

今年度は、昨年度の反省を活かし、下級生を対象に伊吹島や出部屋の知識・文化の伝承を目的とした、昨年の活動報告会を行った。その際にボランティアを募り、瀬戸内国際芸術祭２０１６の２日間活動に加わってもらった。ボランティアの下級生からは、活動後、「出部屋のことを自分で説明したので理解を深めることができた。」「島民の方とも関わることができてとてもいい経験になった。」という感想が得られた。

活動内容の評価として、出部屋の環境整備を行うことで、人々が立ち寄りたいと思う癒しの場を提供することができた。瀬戸内国際芸術祭２０１６で行ったアンケートの結果として、出部屋跡地を訪れての満足度よりも説明を受けての満足度のほうが高い傾向にあり、私たちの活動がより効果的であったと考える。



４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

私たちの活動が１０月３日の朝日新聞に掲載された。また記事掲載のことが香川大学ホームページでも紹介された。これを通して、出部屋についてより多くの人に知ってもらうことができた。学生向けの広報誌「カダイジェスト」にも記事が掲載された。これらについて先生方から声をかけていただき説明をしたり、頑張ってと後押しをいただき私たちの活動や伊吹島についてのアピールができていることを実感した。

また、出部屋跡地入口に新たに英訳した説明版を設置する際、協力を行った。今後伊吹島を訪れた外国の方にもその説明版を読めば、出部屋が理解できるようにした。

瀬戸内国際芸術祭２０１６では、出部屋跡地を訪れた方々から「出部屋というものを

初めて知った。産後一人だといろいろ大変なのでみんなで協力したり聞けたりするのはいいなと思った。」、「現代にはない昔ながらの人と人とのつながりがすばらしいと思います。」、「伊吹島の風習・地域特性がよくわかりました。」、「各島や地域によって特色があり、このような文化を知ることができた。」というような感想をいただき、私たちの説明で少しでも多くの方に出部屋について知ってもらうことができたと感じた。

出部屋「共育」の原点

香川大生 秋季・瀬戸芸にあわせ紹介

観音寺・伊吹島

出産を終えた女性たちが、赤ちゃんと一緒に共同生活を送った観音寺市・伊吹島の「出部屋」について知ってもらおうと、香川大医学部看護学科の学生が活動している。「芸術作品だけでなく、かつて島にあった出部屋に関心をもってほしい」と、8日から秋会期が始まる瀬戸内国際芸術祭にあわせ、島を訪れる人に出部屋をガイドする予定だ。

学生たちの取り組みが始まったのは昨年。香川大の夢チャレンジプロジェクト事業の支援を受け、看護学科の学生が出部屋を利用した島の女性の話を聞いたり、出部屋を紹介するパンフレットなどを作ったりした。今年は8人の後輩が活動を引き継ぎ、島民の話を聞き、9月末には出部屋跡地の草を刈ってハーブを植え、芸術祭で訪れる人を迎える準備を進めた。

出部屋は、お産を終えた女性が赤ちゃんとともに家を離れ、約1カ月間すごした共同の部屋のこと。出産などが秘匿とされた時代、島では産後の女性は夫と離れ、赤ちゃんとともに出部屋で暮らしていた。国内にある産小屋のなかでは最も遅いとみられる1970年まで使われ、83年に県道工事のため解体された。

穢れのため煮炊きの火をわける別火の生活ではあったが、出部屋で女性たちは一緒に食事をとり、母乳が出にくいときはほかの母親が与え、育児について教え合うなど、のびのびと過ごしていたという。

芸術祭秋会期の15、22の両日、出部屋があった場所にパネルを設けて、学生たちが訪れた人に出部屋について話す予定だ。プロジェクト代表を務める4年生の山尾菜摘さん(22)は「瀬戸芸で島を訪れた人、いまお母さんだったり、これからお母さんになる人に出部屋の跡地に立ってもらいたい。新しい命をどう迎えるのか、命の大切さを考えるきっかけになったらいいなと思っている」と話した。

(渡辺翔太郎)

出産の疲れ癒やした共同生活

訪れた人を迎えるため、出部屋跡地をきれいにする香川大の学生たち＝観音寺市の伊吹島

「イリコの島」として知られる伊吹島は昔から漁業が盛んで、夫が漁に出ている間、妻は魚の加工や育児、家事などの重労働をこなさなければいけなかった。しかし、出部屋にいることで仕事から解放され、出産の疲れを癒やし、赤ちゃんと濃密な時間を過ごすこともできた。島全体で子どもを育てるという島の原点が出部屋にはあったとされる。

活動している学生たちは、母性看護学ゼミで伊吹島の出部屋について学んでおり、助産師を目指す学生もいる。今年度のメンバーの1人で4年生の伊藤菜那さん(22)は「いまは病院で出産して、1週間で自宅に戻っているが、出部屋でわきあいあいと過ごすことがお母さんたちにいい影響を与えていたことが、学んでいくうちにわかった」と感じているという。

▲赤ちゃんを抱き、出部屋で過ごす母親たち▲出部屋入りの様子。先を歩く女性が妊婦で、親戚の女性たちが道具を運び、出部屋に向かった▼▼助産師の産によるものもよく▼▼助産師の産でおしめを干す女性＝いずれも写真家の故緑川洋一さん撮影、伊吹島

5．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

インタビューや環境整備・瀬戸内国際芸術祭２０１６などの島での活動を通し、島を訪れた多くの人に出部屋について知ってもらうことができた。また、下級生にもボランティアとして一緒に活動してもらうことで出部屋という貴重な風習を伝承することができた。看護学科の学生としてこの活動を通して、漁が盛んな伊吹島の特有な風習がある中で、妊娠・出産・育児をする女性の苦労や強さを感じ、またそこには家族や同じ境遇の女性の協力・支えが不可欠であったことを学ぶことができた。母子を取り巻く環境とそれが与える影響は母性看護学で学んできたが、実際に島で活動し島の人々と交流を深めることで、伊吹島・出部屋についても母性看護学についてもより学びを深めることができた。今後看護師・保健師・助産師として働く私たちにとって、とても貴重な体験であった。

６．反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今年度の活動では、昨年度の反省を活かして、下級生のボランティアを募って瀬戸内国際芸術祭２０１６で一緒に活動を行った。しかし、構成員が４年生のみであったため、実習や就職活動によって活動が十分に行えない時期があった。そのため、次年度以降では構成員に下級生を含めることで、年間を通してより充実した活動ができるのではないかと考える。

７．実施メンバー

代表者　山尾　菜摘（医学部４年）
構成員　伊藤　菜那（医学部４年）
柏田　菜那（医学部４年）
鎌矢　紀子（医学部４年）
久保　佳織（医学部４年）
坂田　成美（医学部４年）
高山　結衣（医学部４年）
藤田　絵理（医学部４年）